

2-O-1

## 大学教職員が学生からの何気ない相談に応じることについて考える —哲学的な人間観の必要性をめぐって—

永島 聡

神戸常盤大学では今年度よりカウンセリングルームの開室時間がほぼ半減した。それに伴い、筆者の研究室を「何気なく」訪れる学生数は明らかに増加している。単に雑談をしに来る者もいれば、筆者を臨床心理士とわかった上で、何らかの心理的テーマを意識して来室する者もいる。実質的に「毎日開室している学生相談室」の状態であると言っていいだろう。さらに教員だけでなく職員に関しても、学生が本来の要件以外に何気なく話しかけていく場面は少なくない。これは本学の特徴と言ってもいいのではないだろうか。

上述の場面に共通するのは、狭義のカウンセリングと異なり時間や場所の枠が緩やかであること、そして学生本人が「心理療法」を受けようという動機づけがほぼないということである。いわば人間形成の一場面である。よって教職員はセラピーの技法を熟知しそれを駆使する必要はないであろう。一方で我々は、学生の人生の大切な一場面を共にするのであり、その一瞬には大きな意味があるとも言える。

我々大学教職員は日々の業務に忙殺される中においても、そんな学生たちの人生とはどんなものなのか、今後彼ら彼女らはどんな人生を歩んでいくのか等々、何らかの哲学的な観点は持っておいていいと思う。ここに、Frankl, V.E.のロゴセラピー理論が一助になり得る。なぜならば彼は精神療法家のみならず人間の実存を考える思想家でもあるからである。

2-O-2

## ある大学病院のカラーユニバーサルデザインの現状

菅野亜紀

大田美香 高岡 裕 松浦正子(神戸大学)

2016年度から施行された『障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律』により、障害者に対する合理的配慮として社会的な障壁の除去が、教育機関や医療機関には求められる。我々は、視覚障害の患者に対する情報保障の研究に取り組んできており、今回はある大学病院における掲示の視機能異常患者への対応、特にカラーユニバーサルデザイン状況について調査した。カラーユニバーサルデザインとは、色覚タイプの違いを問わず、より多くの人に利用しやすい製品や施設・建築物、環境、サービス、情報を提供するという考え方である。

まず、NPO 法人カラーユニバーサルデザイン機構のデザインガイドブック等のガイドラインを基に24項目の調査項目を作成し、○:問題なし、△:どちらともいえない、×:問題あり、NA:適用外、で評価する調査票を作成した。次に、調査者2名が大学病院内16ヶ所を調査票により評価した。本調査の結果、色弱者や白内障の患者が識別困難と考えられる文字・図・記号や配色が散見された。以上の結果を、改善案や注意点としてまとめ、提言を作成した。本研究はJSPS 科研費 26463209 (代表:松浦正子)、15K11548 (代表:高岡裕)による研究成果の一部である。